

## 鎌倉僧医の医の倫理観 (3)

— 『看病用心鈔』の作者について—

関根 透

鎌倉時代の中頃に著したとされる『看病用心鈔』には、現代でも通用するようなターミナル・ケアに関する叡智が満載されている。その『看病用心鈔』は「前書き」、「十九ヶ条の条文」と「後書き」の三部分で構成されている。その記述は大変具体的である。

まず、「前書き」では、看取る者と看取られる者との、臨終時における信頼関係の大切さが示されている。その関係は仏と僧、親と子の如く最も親密な、利害を超えた信頼関係でなければならぬと説いている。「十九ヶ条の条文」では、環境の整備、看病僧の数や役割、延命より苦痛の緩和、称名念仏の大切さ、往生させるために心からの援助、食べ物や遺言、見舞客への対応、慈悲心の大切さなどが詳細かつ具体的に語られている。最後の「後書き」では、以上の十九ヶ条は思いやりある臨終作法の大筋を述べたものであるから、全てこのようにしなさいと言うのではないと述べ、病人の症状や性格が各々異なるように、その病人に合わせて臨機応変に慈悲をもって対処すべきことを説いている。こうした内容は『看病用心鈔』において、病人を治し、癒して社会復帰を目標とした看護心得を示したのではなく、死に逝く人が如何に人間らしく往生できるか、の「救い」を目的としたものである。それは臨終行儀の作法を示

した書物である。

『看病用心鈔』が著された一二四〇年頃は、末法の時代と言われ、多くの民衆は打ち続く戦乱や天変地異、飢饉などによって「末法の世」を実感させられていた。源信の『往生要集』が示す浄土の阿弥陀信仰は民衆の関心を集め、末法思想を流行させていた。従って、全ての人々にとって浄土に往生することが救いの目標となっていた。しかし、来世で幸せに往生するためには、如何にすればよいのか、かつての書物にはその具体的な死の瞬間の作法が示されていないのである。『往生要集』の「臨終行儀」<sup>①</sup>や善導大師の『臨終正念訣』<sup>②</sup>、『観念法門』<sup>③</sup>などの死の作法は簡単な記述であり、また作法の流儀が種々あって、真に人々を納得させるような客観的な死の作法は示されていなかったのである。当時の人々は、浄土へ至る死の瞬間が最も大切であると考えており、死に臨んでは、善知識、知識と呼ばれる看病僧の介在によって往生することが望ましいと考えられていた。そこで、これらの疑問や希望に答えるべく著わされたのが『看病用心鈔』であると思われる。したがって、『看病用心鈔』はその表現も具体的であり、浄土へ至る救いの道として、臨終の作法をわかり易く示したのであろう。

さて、この『看病用心鈔』の作者であるが、先人の研究や資料などから浄土宗の第三祖・記主禅師・然阿良忠上人が著したものとされている。この解釈が妥当なことと思われるが、現存する写本に良忠上人作とか、良忠上人選述とかを示す明確で、直接的な証拠はない。そこで、現存する『看病用心鈔』の三種の写本や先人の研究業績、当時の社会的背景などを示しつつ良忠上人が作者、撰者であると言われた理由を紹介してみたいと思う。

## 二

現在、『看病用心鈔』の写本は三種ある。第一番目の写本は滋賀県安土の浄厳院に所蔵されている『看病用心抄』

である。第二番目の写本は京都市内の常楽台（寺）に所蔵されている『看病用心鈔』である。第三番目の写本は金沢文庫所蔵の『看病用心鈔』である。

まず、滋賀県安土の浄厳院所蔵の『看病用心抄』の写本（以後、「浄厳院本」と呼ぶ）について説明したい。それは、私が鎌倉光明寺の執筆長・宮澤善弘氏から浄厳院住職・勝山定信氏を紹介され、最初に出逢った『看病用心抄』の写本で、最も印象深かったからである。

浄厳院本の外容は、「看病御用心」の本文が一六枚で、最後に極楽誓願の祈願文が書かれ、その後に「看病御用心」の奥書きが示されている。次に、「魔ノ来迎ト仏ノ来迎トヲ知ル事」が二枚挿入され、最後に『往生要集』の「十楽」の部分が一九枚添付されている。そして、裏表紙に所有者の名前と所有年代が記されている。表紙は濃紺で、左上に白地の台紙で『看病用心抄并十楽』と題名が塗付けされている。文体は平仮名交り文で、流麗な読み易い文字で示され、半枚十行、一行に約二十文字で書かれている。紙質は不明であるが、少し黄色味を帯びた薄い和紙で、虫喰いもなく、極めて保存状態のよい冊子体の和綴書である。

さて、作者を推定できる奥書きの部分を見てみよう。「看病御用心」の奥書きには、次のように書かれている。「此用心書案悟真寺上人作也云々、文保三年正月九日書写早 執筆阿忍 六十七、曆応二年八月六日 以安楽寺御本 於靈山院書写早 南無阿弥陀仏 平等利益 執筆阿念 七十七、康永二年六月二日 於横河靈山院如月坊之草庵書写早 執筆覚阿、貞和二年季秋下旬之比書写早 楽阿在判。以上本蔵ノ分也」とある。「本蔵ノ分」とは、この写本を筆写するに当って、原本には以上の記述が示されてあったことを意味している。つまり、文保三年（一三一九）に六十歳の阿忍が最初の原本を書写し、それを曆応二年（一三三九）に七十七歳の阿念が靈山院で転写し、それを更に、康永二年（一三四三）に三十歳の覚阿が靈山院の如月坊の草庵で書写している。それをまた、貞和二年（一三四六）

に楽阿が転写しているのである。従って、隆堯が書写する以前に四回書写を重ねたことになる。

この後のページには、高野山・蓮華谷僧都の明遍による『能選抄』の中から「魔ノ来迎ト仏ノ来迎トヲ知ル事」の十種が箇条書きで対比して示され、その後「往生要集」「十楽」が平仮名交りで記されている。そして最終ページの奥付けには、次のように示されている。「干時応永廿癸己季暮秋上旬之比 於江州金勝寺東之谷草庵 為末代利益書写之訖 右筆天台沙門隆堯 後見南無阿弥陀仏十遍」とあり、次の裏表紙には「此臨終行儀并十楽令感得之 永為常住物者也 元禄十六年未五月日 浄院十四世貞與（花押）」とある。つまり、隆堯は応永二十年（一四一三）に楽阿が筆写した『看病用心抄』の写本を金勝山阿弥陀寺で書き写したものを、貞與が元禄十六年（一七〇三）に所有したことを記しているのである。

この浄厳院本による『看病用心抄』の作者に関する記述は「此の用心書は案ずるに悟真寺上人作也」とあるが、これを阿忍が書写した原本にそのように記載してあったのか、阿忍自身が「案じて」悟真寺上人としたかが考えられる。要は、この『看病用心抄』では作者を悟真寺上人であると明確に断定する証拠を示していないのである。「案ずるに」と推測した記述になっているので、疑えば、悟真寺上人でないかもしれないとも解される記述である。

また、「悟真寺上人」と記されてあるが、「良忠上人」とする文字は見当たらない。良忠上人と悟真寺上人との関係は、良忠上人が鎌倉の悟真寺に住んだことは、『鎌倉光明寺文書』④から明らかである。従って、良忠上人を悟真寺上人と呼んだとしても不思議ではない。玉山（鈴木）成元氏は『日本歴史』の中で、「悟真寺上人というのは然阿良忠でなければならぬ」⑤と述べている。しかし、浄厳院本には「此用心書案悟真寺上人作也」が気にかかるのである。また、『史料編』では「佐介谷本悟真寺今号蓮華寺」と悟真寺を蓮華寺とも呼んでいるのである。⑥ 本拙論の結論を先に述べると、『看病用心抄』の撰者は良忠上人以外に考えられず、他の多く研究書や現存の資料からも、他に具体

的人物は想像できないのである。これが隆堯が筆写した『看病用心抄』の写本である。

なお、この浄厳院本『看病用心抄』の活字版は三種出版されている。まず、昭和六十一年（一九八六）に大本山光明寺から記主良忠上人七百年遠忌記念として『良忠上人研究』<sup>⑦</sup>が出版され、その中に示されている。更に、『良忠上人研究』の玉山氏の活字版を基にして、和綴の単行書を平成四年（一九九二）に光明寺では『看病用心抄』として出版している。<sup>⑧</sup>この単行書の巻末に「発刊に当って」で、「看病用心抄は、安土浄厳院に伝わり、又、宇治の常楽寺本もあるが、共に京都の浄華院に伝えられた浄華院本の写本であることを玉山成元先生が発表されて、浄土宗三祖良忠上人の撰述であると結論されたものである」と述べている。<sup>⑨</sup>

二つ目の浄厳院本『看病用心抄』の活字版は、『日本浄土教文化史研究』の中で伊藤真徹氏によってなされたものである。<sup>⑩</sup>更に、この伊藤氏の活字版は『臨終行儀』に全文が掲載され、現代語訳と現代のターミナル・ケアから見た解説も示されている。<sup>⑪</sup>

三つ目の浄厳院本『看病用心抄』の活字版は、拙論の『鶴見大学仏教文化研究所紀要』の第三号<sup>⑫</sup>に示してあるものである。ここには三段に示してあり、上段に浄厳院本が示してある。中段には後述する常楽台本、下段にやはり後述する金沢文庫本の三種が比較し易いように各条文ごとに示してある。

以上三種が活字で示された浄厳院本の『看病用心抄』である。どれも読み易いように助詞、送り仮名、句読点が付けられている。しかし、句読点は三種とも異っている。

### 三

第二の『看病用心抄』の写本は、京都・常楽台の今小路覚真氏が所蔵しているもので、最も古い写本（以後「常楽

「台本」と呼ぶ)である。先の浄厳院本と異なる特色として、常楽台本は漢字交りの片仮名で示されている点である。まず、その外容を示すと、桐箱に納められ、さらに包紙で包まれ、そこには『看病用心鈔』の表題と「記主然阿良忠の御作といふ」と記せられている。その左には、貞治二年(一三六三)九月に綱厳が書写したものを存覚上人が写したと奥書きに記されてあると書かれている。

さて、本体の常楽台本は、表紙の左上に直接『看病用心鈔・然阿良忠』と表題が少し黒ずんだ表紙に書かれている。その本文は二十二枚で、表紙を含めて十三頁に亘って同じ中央上部が欠損している。しかし、その欠損部は既に修理され、片仮名で推測可能な部分は新たに文字が補われている。

常楽台本では、作者名を推測させる「奥書き」は次のように示されている。「大願円満 看病用心鈔 本云鎌倉上人御作 私云然阿弥陀仏良忠也」とあり、次頁には、「知死期方」が上旬、中旬、下旬として対のように示されている。更に常楽台本の最後には、存覚上人の跋語が「貞治二癸卯九月廿六日書写畢 老眼老筆不道行之間経数日也 写本者去文和二年二月九日綱厳大僧都 於浄華院所書写之本也 桑門(花押)七十四歳」と記されている。つまり、常楽台本は文和二年(一三五三)に綱厳上人が浄華院で書写したものを、存覚上人が十年後の貞治二年(一三六三)に書き写した『看病用心鈔』の写本であるということである。なお、浄華院については、先の浄厳院本にも「原本は浄華院のものと思われる」<sup>⑬</sup>との指摘があるので、浄華院についてここで簡単にふれてみよう。浄華院は土御門室町の高倉に乾元元年(一三〇二)に向阿が創立した寺院で、暦応二年(一三三九)には等持院を建立するために移転させられている。更に、観応二年(一三五二)頃には、一条室町辺りに移っていたらしい寺院のことである。

常楽台本を筆写した碩学の存覚上人は、正応三年(一二九二)六月四日生れで、奥書きの「桑門七十四歳」と示し、筆写したのは貞治二年(一三六三)である。しかし、「存覚」との名前は見え、また花押から存覚上人との判断も

困難であるが、誕生年と筆写年令から存覚上人筆写の常楽台本と考えることができる。存覚上人は本願寺三世・覚如上人の弟子で、常楽台は存覚上人を開基とする寺院である。その常楽台に常楽台本『看病用心鈔』が所蔵して、伝わっていることから存覚上人筆写の写本と考えることができる。更に鷲尾氏は「其濃淡の墨色、筆力の勁健、殊に花押等疑ふ可からず」<sup>④</sup>と述べ、書写した人物は存覚上人以外は考えられないとしているのである。

常楽台本を筆写した人物は存覚上人としても、『看病用心鈔』の原本の作者は良忠上人であることを伝えているのであろうか。先に「奥書き」に示した如く、作者を良忠上人と断定するには、はなはだ不明瞭であると言わざるを得ない。つまり、「本云鎌倉上人御作 私云然阿弥陀仏良忠也」と。この記述では、鎌倉上人が良忠上人であるという確かな証拠が示されていない。鎌倉上人を「私」である綱殿上人が良忠上人であると推測したのか、また、存覚上人が良忠上人であると判断したのかも不明であると言えよう。鈴木（玉山）氏は「当時、京都に於ける良忠は、悟真寺上人或は鎌倉上人といわれていたであろうことは十分に想像し得るところである」<sup>⑤</sup>と述べているが、やはり、良忠上人を鎌倉上人と呼んだ記録はなく、推測の域なのである。従って、この常楽台本においても、『看病用心鈔』の撰者（作者）を良忠上人とする明確な記録を示していなかった。しかし、鷲尾氏も良忠上人作の『浄土大意』と比較して、表現語句の類似点などを挙げて、良忠上人以外の撰者は考えられないとしている。

なお、常楽台本の写真版が、現在龍谷大学大谷図書館に保存されている。その写真版は今次大戦中に今小路氏からの依頼を受けて保管しており、大戦後の昭和二十二年（一九四七）に今小路氏に返却している。その返却の際に写真を撮り、黒台紙のアルバムに整理保存したものである。戦後の混乱期に写した写真のため、写真はすでにセピア色化し、判読しにくい部分もある。

活字化された常楽台本『看病用心鈔』は拙論の『鶴見大学仏教文化研究所紀要』三号<sup>⑥</sup>以外には見当たらない。ここ

では上段に浄厳院本、下段に金沢文庫所蔵の『看病用心鈔』写本、そして中央にこの常楽台本が比較し易いように各条目ごとに示してある。

#### 四

第三の『看病用心鈔』の写本は、金沢文庫に所蔵されている近年の写本（以後「金沢文庫本」と称する）である。この金沢文庫本は、昭和二十八年（一九五三）六月十四日に当時の金沢文庫長の熊原政男氏が大正大学図書館に所蔵されている石井教道氏が筆写した『看病用心鈔』を転写した写本である。四十一枚の四百字詰原稿用紙にペン字で書き写されている。そこには、赤字による記載があり、その赤ペンによる文章は可円の『臨終用心』の文であると思われる。この赤字は熊原氏が附したものか、大正大学所蔵のものに記載されてあったものかは不明である。ただ同じ赤インクらしいペンで、第一頁の最上に「大正大学図書館蔵之印」が押印のように描かれている。従って、大正大学図書館所蔵の写本に『臨終用心』の文章が比較するために書かれてあったとも考えられる。

さて、金沢文庫本は漢字交りの平仮名文で示されているが、その内容は先の二点の『看病用心鈔』と同じであるものの、文章の表現は多くの点で異っている。例えば、浄厳院本と常楽台本は仮名のみが異っているものの「敬知識看病の人に申上候。」で冒頭が始まっている。しかし、金沢文庫本は「善導大師の曰く」で始まっている。その外容は厚紙の表紙に「然阿良忠 看病用心鈔」と左上に墨で書かれ、四十一枚の原稿用紙（三枚は便箋）が裏表紙の厚紙とともに和綴で作られている。この便箋の部分は漢字交りの片仮名文で、多分常楽台本の十三条、十四条、十五条で、欠落部分を補ったものと思われる。また「後書き」の後に、一条が付け加わっているのも金沢文庫本の特色である。

この金沢文庫本は、大正大学所蔵の『看病用心鈔』を筆写したものであるが、この金沢文庫本の最後に、熊原氏は

「昭和二十八年六月十四日 大正大学図書館蔵本ニヨリテ写ス。伝ヘキクニ、専修寺蔵本ハ今次戦災ニ消滅セリトイフ。金沢文庫ニテ 熊原政男誌」と結んでいる。

実は、大正大学図書館に熊原氏が筆写した石井氏の写本の閲覧を申込んだら、「すでに戦後の混乱期に紛失して欠本となっている」との回答であった。従って、大崎専修寺の『看病用心鈔』の流れを駆む写本は、金沢文庫本のみとなる。

話が少し迂遠してしまつたが、金沢文庫本における『看病用心鈔』の作者（撰者）についてはどんな表現になっているか、その「奥書き」を紹介すると次のようである。「予曾テ京都市西本願寺派法鼓台本ヲ閲覽セシトキ、存覚ノ直筆ニシテ、鎌倉上人作ト記スル右ト同一名ノ本ヲ見タリ。爾来、茲ニ二六年、鎌倉上人ハ記主上人ニ非ザルカト心ツキ、諸方ニ尋ネ居リシニ、計ラズ講義中ニ右ノ趣ヲ話セシニ、広瀬念成君ハ自坊ニアル事ヲ告ゲラル。依ツテ、之ヲ借覽シ写得セシモノナリ。原本大崎桐ヶ谷専修寺所蔵（徳川写本） 昭和貳年十二月十四日 石井教道記」。次いで、熊原氏の先の文が示してある。結局、ここでも「良忠上人作」とは言うものの、間接的表現であつて、『看病用心鈔』の作者を良忠上人と断定する記述は示されていなかったのである。

以上が金沢文庫本についてであるが、実は『日本科学技術史』<sup>⑧</sup>に金沢文庫本の第一条と第二条の一部分が写真で掲載してある。それには流麗な筆書きで書かれ、これが専修寺の写本か、石井教道氏の筆写による大正大学写本かは不明であるが、専修寺の流れを駆む写本であることは確かである。少し調査してみたが、残念ながら全くわからなかつた。

なお、金沢文庫本の活字版は、その一部は『鎌倉時代医学史の研究』<sup>⑨</sup>と『看護学生のための日本看護史』<sup>⑩</sup>に記載されており、どちらもかなり詳しい解説もなされている。金沢文庫本の全文を活字版として紹介しているのは、拙論

の『鶴見大学仏教文化研究所紀要』②三号のみであると思われる。

## 五

以上、現存する三種の『看病用心鈔』写本の「奥書き」を中心にして、良忠上人を撰者と特定すべき証拠を探索してみた。しかし、残念ながら良忠上人を撰者とする確かな証拠は示されていないかった。また、良忠上人に代るべき具体的な人物も現われてこなかった。

それでは『看病用心鈔』の撰者はだれなのか。鷲尾氏や玉山氏などの先人の研究によると、良忠上人以外に考えられないと言う。しかしながら、良忠上人の伝記や良忠上人の著作目録にも『看病用心鈔』は記せられていない。『看病用心鈔』の内容は浄土宗の目的である安心立命を基にして、臨死者に対する看病僧への看取りの方法、準備、作法などが具体的に示されている宗教的な看取り心得である。この心得は、良忠上人が著した『浄土大意』の内容と表現が酷似していることも事実である。鷲尾氏は『浄土大意』の「善知識用意の事」と『看病用心鈔』の第四条を比較して、その後「此他一、二に止らず、今の用心鈔が病重く臨終にせまれるを見る用意を教ふるにあるが故に、『浄土大意』の同所に比して詳しきは道理なり。今の鈔と『浄土大意』は姉妹関係にある」②として『看病用心鈔』の撰者を良忠上人と断定しているのである。また、玉山氏も、『浄土大意』と『看病用心鈔』を比較して「看病用心鈔は良忠の作であることは間違いない」③と述べた上で、更に「良忠が看病用心鈔を作ったことは、彼の伝記をはじめとし、浄土宗関係の著作目録にも記せられていない。けれども、内容からみれば良忠が編述したものということができる」④と述べている。また、伊藤真徹氏も「良忠上人は『往生要集』研究の権威者であって、『往生要集記』、『往生要集義記』の撰述は世に知られるところである」⑤と述べている。つまり、鷲尾氏も玉山氏も伊藤氏も『看病用心鈔』の

撰者は、良忠上人以外は考えられないとされているのである。

写本に登場する「鎌倉上人」、「悟真寺上人」について、如何に解釈しているのであろうか。浄厳院本と常楽台本でも先述したように、鷲尾氏も玉山氏も、当時京都では良忠上人が悟真寺上人、或は鎌倉上人といわれたであろうことは十分に想像しうると述べている点から『看病用心鈔』の撰者を良忠上人としている。

正応元年（一二八八）十二月十八日に、良忠上人の弟子・道光上人がまとめた『然阿上人伝』には、良忠上人が臨終行儀を行ったことが示されているが、『看病用心鈔』のことは語られていない。「九帖書記二十三卷、要集記八卷」などの他、最後に「三心私記一卷等也」が『然阿上人伝』に記載され、「一卷等也」に『看病用心鈔』を含めることができるようにも思えるが、……。この『然阿上人伝』は良忠上人が亡くなって、五ヶ月後に著わされた伝記なので、それなりに信憑性のあるものと考えられる。この伝記の中に良忠上人の臨終行儀の姿まで載せてあるのであるから、『看病用心鈔』という書名が記されていないのは不思議である。

以上、少ない資料を基に門外漢の私が作者探索を試みた大きな挑戦であったが、能力外のことであり、結局、鷲尾氏、玉山氏、伊藤氏ら先人の研究の成果を基にして『看病用心鈔』の医の倫理観を良忠上人撰述として検討調査してゆくことにした。

## 六

『看病用心鈔』が著わされた鎌倉時代は、「乱世」と呼ばれ、政治的にも、経済的にも大きく価値観が転換した時代であった。人々の生活は混乱し、人々は目標とすべき精神的支柱を失い、仄暗い混沌とした時代に生かされていた。こうした「乱世」は一般民衆にとって悲惨な生活を強いられ、むしろ住みにくい時代であった。そこ

には「世紀末的な様相」が示されていたと思われる。

さて、現代を考える時、『看病用心鈔』が著された時代に、現在の日本の状況が酷似しているように思われる。今、激動の二十世紀が終焉を迎えようとしている。それは鎌倉時代に似て、至るところで「世紀末」的な様相を呈しているのである。繁栄の後の現在の生活は多様化し、複雑化し、混沌としている。豊かさを享受した後には環境問題、老人問題、エネルギー危機、プライバシーの問題など、簡単に解決策を見い出せないようなジレンマの問題に直面している。まさに、「乱世」と呼ばれるような世紀末な様相を呈しているのである。

そこで、現代の転換期をより善く生きるために、華やかな貴族の時代から転換した鎌倉時代の叡智に学びたいと思っている。良忠上人の『看病用心鈔』は、末法時代における「救い」を目的とした看病の叡智をうまく説明している。良忠上人の説く「看病」とは、社会復帰を目的とした「治療」ではなく、温かい看護を意味する「癒し」でもなく、それより高度なターミナル・ケアを目的とした「救い」の姿を示していた。従って、『看病用心鈔』は臨終行儀を示したターミナル・ケアの書物であるが、そこには、愛情に満ちた看取りの作法が具体的に説かれている。そのほとんどは、現代の医の倫理を考える際に有用な叡智となりうる考え方と行為である。本拙論をまとめるに当たって、この『看病用心鈔』には時代を超えた叡智が満載されていることを知り、私は真摯に学ぶべきことを痛感した次第である。なお、本拙論は、平成十一年度文部省科学研究費（代表者・高崎直道）の助成を受けて調査し、まとめたものである。

また、『看病用心鈔』の倫理的な事柄については、若干の条文を取り上げて、本研究の平成十一年度の第一回研究会でも発表した。

引用文献

- ①源信『往生要集』「臨終行儀」・最明寺本往生要集・一九八八・四〇三、四〇四頁
- ②善導『臨終正念訣』浄土宗全書四卷・山喜房仏書林・一九九一・七九四頁
- ③善導『観念法門』（観念阿弥陀仏相海三昧功德法門）浄土宗全書四卷・山喜房仏書林・一九九一・二二二～二四〇頁
- ④大本山光明寺編『天照山光明寺』・大本山光明寺・一九八六・九九頁
- ⑤鈴木成元『看病用心鈔について』・『日本歴史』一三九卷・一九六〇・一〇九頁
- ⑥貫達人ら『鎌倉市史・史料編』三四七三（『良暁述聞制文』より）・一九六二・四四五頁
- ⑦玉山成元「良忠上人著『看病用心鈔』について」・『良忠上人研究』・大本山光明寺・一九八六・三三九～三五五頁
- ⑧北邨謙順編・然阿良忠著・『看病用心鈔』・大本山光明寺・一九九二・一～四四頁
- ⑨北邨謙順「発刊に当って」・『看病用心鈔』・大本山光明寺・一九九二・最終頁
- ⑩伊藤真徹『日本浄土教文化史研究』隆文館・一九七五・四四七～四五九頁
- ⑪神居史彰・田宮仁ら『臨終行儀』溪水社・一九九三・一四一～一六五頁・三六四～三七一頁
- ⑫関根透『鎌倉僧医の医の倫理観(2)』鶴見大学仏教文化研究所紀要・三号・一九九八・三三～五四頁
- ⑬玉山成元「良忠上人著『看病用心鈔』について」・『良忠上人研究』大本山光明寺・一九八六・三五四頁
- ⑭鷲尾教導『記主禅師撰と伝ふる「看病用心鈔」に就て』・仏教史学・三篇八号・六五八頁
- ⑮鈴木成元『看病用心鈔』について「日本歴史」・一三九卷・一九六〇・一〇九頁
- ⑯関根透『鎌倉僧医の医の倫理観(2)』鶴見大学仏教文化研究所紀要・三号・一九九八・三三～五四頁

- ⑰可円『臨終用心』・京都書林・赤井長兵衛・一七八〇・一〇三二丁
- ⑱石原明「日本の医学史」『日本科学技術史』・朝日新聞社・一九六二・一六六頁
- ⑲服部敏良『鎌倉時代医学史の研究』・吉川弘文館・一九八八・一六三〇一六六頁
- ⑳加藤文三協力『看護学生のための日本看護史』・医学書院・一九八九・三六〇三七頁
- ㉑関根透『鎌倉僧医の医の倫理観(2)』鶴見大学仏教文化研究所紀要・三号・一九九八・三三〇五四頁
- ㉒鷲尾教導『記主禪師撰と伝ふる看病用心鈔について』・仏教史学・三篇八号・六六〇頁
- ㉓鈴木成元『看病用心鈔について』『日本歴史』・一三九卷・一九六〇・一一〇頁
- ㉔鈴木成元『看病用心鈔について』『日本歴史』・一三九卷・一九六〇・一一七頁
- ㉕伊藤真徹『日本浄土宗文化史研究』・隆文館・一九七五・四四四頁
- ㉖道光『然阿上人伝』『浄土宗全書』・一七卷・山喜房仏書林・一九七二・四一〇頁